

# 紙本墨書「中山楽童子向惟新」保存修復報告

上江洲安亨\*1 當間 巧\*2

## 1 はじめに

本作品は、(財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター所蔵の「中山楽童子向惟新筆墨書」である。修復前は折れ、折れ山の擦れ、亀裂箇所の損傷があり、機械表具仕立であった為、平成22年7月5日から平成23年2月28日、石川堂で修復を行った。なお、本作業は上江洲安亨を監督職員とし主な修復作業ならびに本報告書の分析ならびに作成は當間巧が行った。

## 2 作品の構造及び寸法

修復前後の法量は以下の通りです。

### 1) 本紙

- (1) 種別 紙本具引き墨書
- (2) 材料 竹紙 (高知県立紙産業技術センター分析)
- (3) 寸法: 修復前 丈105.1cm 幅27.0cm  
: 修復後 丈105.2cm 幅27.2cm

### 2) 表装

修復前

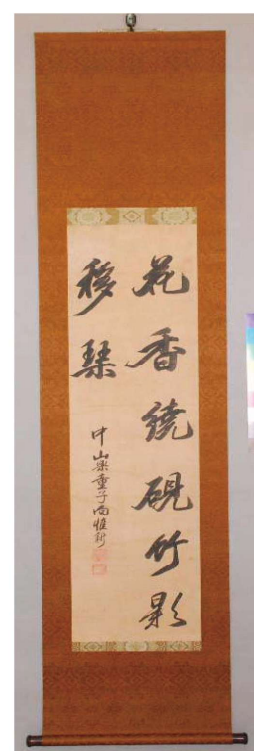
- (1) 形式 掛幅装・袋表具 (図1)
- (2) 表具寸法: 丈173.5cm 幅36.0cm
- (3) 裏打ち紙: 3層  
肌裏、増裏、総裏: 機械表具用 (紙)
- (4) 表装裂 一文字: 黄丹地唐草文金襴  
総縁: 鼠地花文緞子
- (5) 軸首 : 紫檀頭切軸
- (6) 収納箱 : 桐印籠箱

修復後

- (1) 形式 掛幅装・袋表具 (図2)
- (2) 表具寸法: 丈177.2cm 幅39.3cm
- (3) 裏打ち紙: 4層  
肌裏: 楮紙 (新調)  
増裏: 美栖紙 (新調)  
中裏: 美栖紙 (新調)  
総裏: 宇陀紙 (新調)
- (4) 表装裂 一文字: 黄土地蜀江文銀襴 (新調)



(図1) 修復前・表具全図



(図2) 修復後・表具全図

\*1 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課 調査展示係 係長

\*2 石川堂

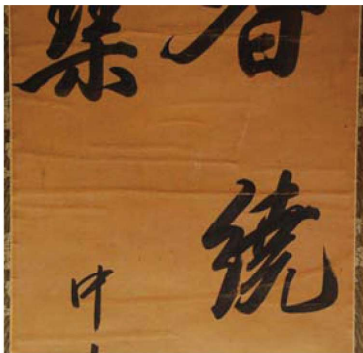
総縁：茶地唐花文紬（新調）

(5) 軸首：黒檀短撥軸（新調）

(6) 収納箱：桐太巻添軸桐印籠箱（新調）

### 3 修復前の損傷状況

- 1) 本紙には、横折れが多数生じていた。（図3）
- 2) 本紙折れ山が擦れ、割れにより墨の剥落が生じていた。（図4）
- 3) 本紙に小さな欠失、亀裂箇所が確認できた。（図5）
- 4) 裏打ち紙に糊浮きが生じていた。



(図3) 斜光線撮影部分拡大写真  
多数の横折れが確認できる。



(図4) 折れ山の擦れ、割れ



(図5) 本紙部分 欠失箇所写真

### 4 過去の修理状況

- 1) 本紙折れの部分に過去の修理痕、折れ伏せ入れが確認出来た。（図3）  
巻き径が細く、折れ伏せ入れ紙が厚いため、本紙に横折れの影響を及ぼしていた。
- 2) 軸木と表具裂地をセロハンテープで止めた箇所が見られた。

### 5 修復方針

- 1) 墨の安定を計る為、剥落止めを行う。
- 2) 本紙の欠失、亀裂箇所に適する補修紙で繕いを施す。
- 3) 本紙の折れが生じている箇所、及び今後明らかに生ずると思われる箇所に、伝統的な修理技法である折れ伏せを入れる。
- 4) 表装裂、軸首、鐙、上軸、中軸、掛け紐等を新調する。
- 5) 収納箱として、太巻添軸桐印籠文化財保存箱を新調する、収納保存にあたっては太巻添軸を添えて巻き、折れ破損の要因を軽減する。また木綿の袱紗を新調し表具を包み収納箱に保存する。
- 6) 高知県立紙産業技術センターに委託し、本紙の繊維組成試験を行なう。

### 6 修復工程

- 1) 修復前に写真撮影を行い、本紙の状態を調査した。
- 2) 表具装を解体後、薄膠溶液を用い部分的に剥落止めを行った。
- 3) 薄布海苔溶液（2%）を用い本紙の剥落止めと本紙表面保護のために養生紙で二層表打ちした。養生紙にはレヨン紙を用いた。

- 4) 汚れの除去作業、本紙を傷めない範囲にとどめた。
- 5) 本紙旧肌裏紙を捲り取った。(図6)

- 6) pH ストリップ測定法・メルク社製を使用し、本紙の pH 測定を行った。(図7)

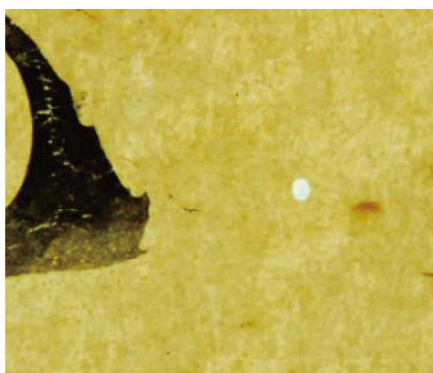


(図7) 中性値のpH7.0を示した。



(図6) 裏打ち紙を捲り取る。

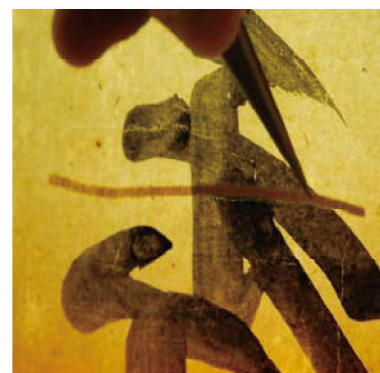
- 7) 本紙欠失、亀裂箇所に繕いを施した。補修紙には本紙の風合い 質感などの点から古紙(竹紙)が最も適しているため使用した。(図8~10) 糊は小麦粉澱粉糊(新糊)を用いた。



(図8) 本紙裏面欠失箇所



(図9) 繕いを施す



(図10) 亀裂箇所の補修作業

- 8) 新糊を用い、美濃紙(長谷川紙)で本紙の肌裏を打った。肌裏紙は天然染料(矢車)で染色、水酸化カルシウム溶液で媒染後を用いた。(図11)
- 9) 新調した表装裂に新糊を用い美濃紙(長谷川紙)で肌裏を打った。裏打ち後、仮張りを施した。
- 10) 本紙、表装裂に美栖紙を使用し増裏を打った。糊は古糊を使用した。裏打ち後、仮張りを施した。(図12)

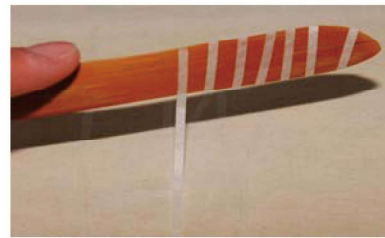


(図11) 肌裏打ち作業



(図12) 本紙の増裏打ち作業

- 11) 本紙の横折れが生じている箇所、今後明らかに生ずると思われる箇所に折れ伏せを入れた。折れ伏せ紙は美濃紙（長谷川紙）を用い、糊は新糊を使用した。（図13）



(図13) 折れ伏せ入れ作業

- 12) 本紙と表装裂を付け回し（図14）古糊を用いて美栖紙で中裏を打った。（図15）裏打ち後、仮張りを施した。



(図14) 表装裂を本紙に付け回す。（図15）中裏打ち作業

- 13) 古糊を用い宇陀紙で総裏を打った。  
裏打ち後、仮張りを施した。（図16）



(図16) 総裏打ち作業

- 14) 鐙、軸首、上軸、中軸、掛け紐等を新調した。  
新調した軸首は黒檀短撥軸を使用した。

- 15) 十分に乾燥させた後、表具に仕上げた。

- 16) 桐太巻添軸桐印籠箱を新調し、紙帙を製作後、表具を木綿の袱紗に包み収納した。（図17）



(図17) 桐太巻添軸桐印籠箱

## 7. 作品の技術分析

「中山楽童子向惟新」の修復過程において、本紙の繊維分析、顕微鏡撮影を試みた。

詳細は以下の通りである。

### 1) 本紙の繊維分析

高知県立紙産業技術センターに依頼し、本紙繊維組成試験と顕微鏡写真撮影を行った。試験の結果「竹」の繊維が検出された。(図 18) この事から本紙は「竹紙」と推測される。

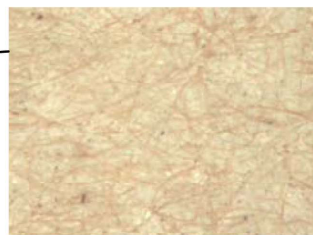
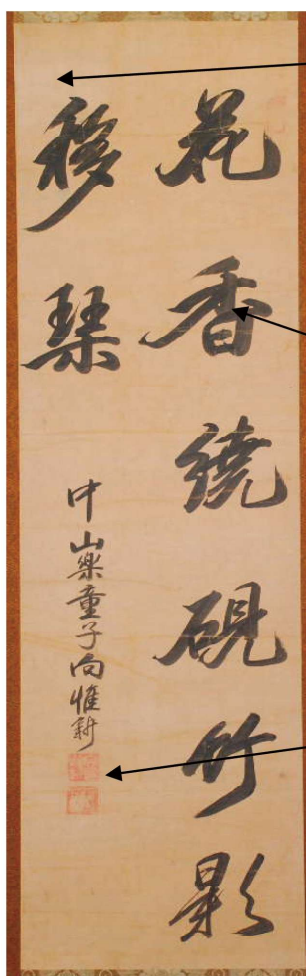
竹の繊維を主として製紙原料とする紙とくに中国で若竹の繊維を処理して作られていた。竹の種類はきわめて多く、品質もよいが繊維が短く破れやすい紙。



(図 18) 「竹」 繊維

### 2) 本紙の顕微鏡撮影

本紙の下図に示す 3 箇所での顕微鏡撮影を行った。撮影は修復後、本紙の安定した状態で実施した。矢印の示す場所が写真の撮影箇所になっている。



本紙左上部



墨書部分



朱印部分



修復前・本紙部分紫外線撮影写真  
白色の違いによって胡粉が確認できる。  
この事から胡粉などを刷毛で引き加工  
を施した、具引紙だと思われる。

## 8. 使用諸資材

### 1) 接着剤

#### (1) 小麦粉澱粉糊 新糊 (中村糊店・京都市)

原材料は小麦粉澱粉。水によく沈殿させ煮出した後、糊化したものを使用する。肌裏打ち・折れ伏せ入れ等各所に使用。



#### (2) 古糊

原材料は小麦粉澱粉。新糊を瓶に入れ5年程鍾乳洞にて保存したものを使用した。新糊に比べ接着力は劣るが、柔軟性を与え保つ事が出来る。「打ち刷毛」という特殊な表具用刷毛を使用し裏打ちを行う。増裏・中裏・総裏打ちに使用。



#### (3) 布海苔 (八木熊・福井県)

原材料は紅藻類のフノリ科の海草。水に煮出した溶液を使用する。適度な粘度・接着力を有する。本紙表打ちに使用。



#### (4) 膠 (パレット製・神奈川県)

原材料は獣類の骨・皮・腱等。水で煮出した後ゼラチン質を固めたもの。可逆性に優れ高い接着力を有する。日本画・絵具、墨の固着材。墨の剥落止めを使用。



### 2) 染料

#### (1) 天然染料 矢車 (三樹嘉七商店製・京都市)

原材料はカバノキ科ハンノ木属夜叉五倍子の果実。果実を水で煮出した後の染料溶液を使用する。本紙肌裏紙の染色に使用。



#### (2) 科学染料 商品名デルクス (田中染料店製・京都市)

黒・ブラック F-BN

黄・エロー F-R

茶・ブロン F-GD

裂地の染色に使用。



### 3) 紙

#### (1) 美濃紙 長谷川紙・長谷川和紙工房製（岐阜県美濃市）

原材料はクワ科の楮。中でも国内産那須楮白皮を使用した手漉き和紙。薄く強靱で長期の保存に耐える。本紙、表装裂の肌裏紙・折れ伏せ紙に使用。

#### (2) 美栖紙 上窪正一製（奈良県吉野群）

原材料クワ科の楮。紙漉きの際、古粉（炭酸カルシウム）を添加する表具用手漉き和紙。薄く柔軟性があり、古糊と合わせて使用する。増裏紙、中裏紙に使用。

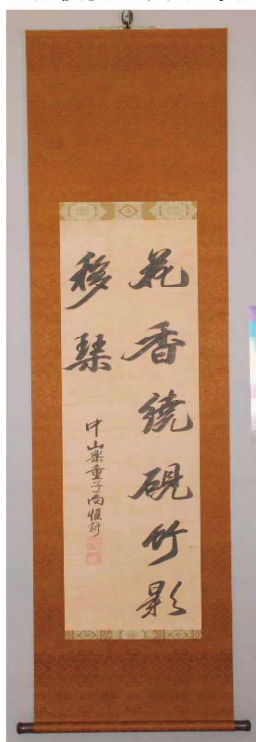
#### (3) 宇陀紙 福定 上田俊雄製（奈良県吉野群）奈良県指定伝統工芸品

原材料クワ科の楮。国内産楮を使用し、地元特産の「白土」を混入し伝統的製法で漉かれた表具用手漉き和紙、強靱で長期の保存に耐える。美栖紙に比べやや厚いが、風合い・質感共に軟らかさがある。古糊と合わせて使用する。総裏紙、上巻き絹の裏打ちに使用。

## 9 修復後の本紙の状態

### 1) 表装裂

修復前は機械表具仕立てで上下・柱に鼠地花文緞子、一文字には黄丹地唐草文金襴を配した袋表具に仕立てられていた。修復後は上下・柱に茶地唐花文紬、一文字に黄土地蜀江文銀襴を新調し袋表具に仕立てた。上下・柱に使用した茶地唐花文紬は、デルクス科学染料を用いて染色、色調節した。



修復前



修復後

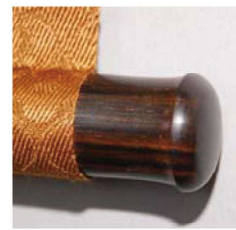


### 2) 軸首

修復前の軸首は「紫檀頭切軸」が使用されていた。今修復では全体との調和を考慮した結果、「黒檀短撥軸」を使用した。



修復前 紫檀頭切軸



修復後 黒檀短撥軸

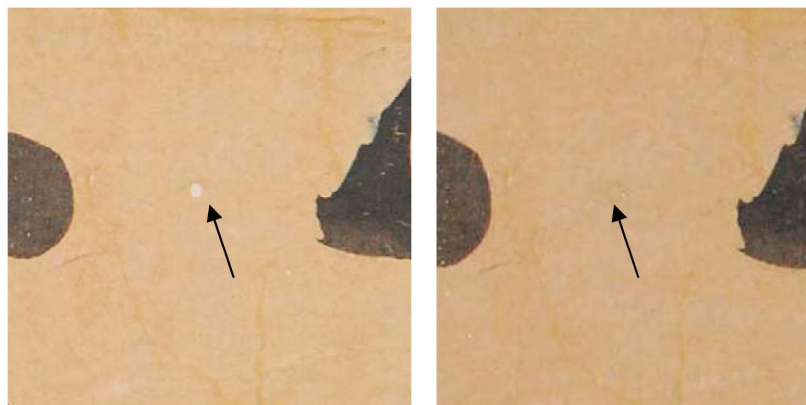
### 3) 欠失箇所

左：修復前

旧修復では欠失箇所に繕い紙は施さず裏打ちのみの処置であった。

右：修復後

補修紙には本紙の風合い質感などの点から古紙（竹紙）を使用した。



### 4) 本紙の折れ

斜光線を下方より照射して、修復前後の状態を比較。

左：修復前

強い折れが多数確認できる。

右：修復後

折れが収まり平滑な本紙面。



## 10 結び

琉球王国時代、江戸上りの時に滞在先々などで多くの書が残された。本作品も楽童子で江戸に上った向惟新筆の墨書である。

今回修復作業を行った「中山楽童子向惟新」は前回の修理から経過していなく、機械表具仕立で本紙・表装裂に肌裏紙、増裏紙、総裏紙の計3層の裏打ちが施されていた。前回の修理で本紙折れ部分、折れ伏せ入れ紙の紙が厚く、軸装の巻径も細かった為、本紙に折れ、折れ山の擦れ、折れ山の亀裂、折れ部分剥落の影響を及ぼしていた。更に本紙料紙小さな欠失箇所の欠失は、本紙料紙のみに限られていた、前回の修理では欠失箇所に補修は施さず、肌裏打ちが施されたと考えられる。今回の修復では長期的な展示保存を考慮し、強靱で上質

の和紙を用いて本紙・表装裂に肌裏紙、増裏紙、中裏紙、総裏紙の計4層の裏打ち紙を施し、亀裂、欠失箇所には類似の古紙（竹紙）を選定し、補修繕いを施した。また、横折れが生じている箇所、今後明らかに生ずると思われる箇所には伝統的修理技法である、折れ伏せを入れ、作品を桐太巻添軸に添えて巻き、折れ破損の要因を軽減し長期的な展示保存に堪える事が可能となった。今回の修復によって琉球王国時代、向惟新が残した（墨書）を、貴重な文化財として後世に伝える事が出来ると確信している。